

## 第4回 田遊び

### ーデンデンガッサリ・瀧山寺鬼祭りを中心にしてー

平成28年1月25日

#### 1 田遊びとは

新年に行われる豊作祈願の予祝行事の一つ。御田、田祭り、庭祭り、庭田植えなどとも呼ばれている。寺院の修正会に伴って行われてきたものも数多く存在する。

年の初めに神仏の御前で、模擬的に一連の農作業を演じ、豊作を祈念する芸能で、これは田楽の演目に含まれているだけでなく、単独の行事としても行う所が多い。愛知県では、田楽と同様に新年の行事として三河を中心に現在も6カ所で伝承されている。僅かながら尾張(2カ所)でも確認できる。

田遊びが、文献に登場するのは、伊勢神宮の記録である「皇太神宮儀式帳」(延暦23年・804)には、内宮と外宮で墾り初めの時に神田の隅を鍬で打ったことが記され、「皇太神宮年中行事」(建久3年・1192)に初めて「田遊」の用語を見る事が出来る。

#### (1) 田遊びの分布

単独で田遊びを伝承しているのは、三河では、豊川市の砥鹿神社・菟足神社・財賀寺、岡崎市山中八幡宮・瀧山寺、西尾市熱池八幡社の6カ所。尾張では、名古屋市中区岩塚の七所社、津島市の津島神社の2カ所。田楽を含めると愛知県内の田遊び芸能は、現在でも12カ所で伝承されている。

#### (2) 東海地方の呼称

- ① 御田
- ② 御田植え祭り、庭祭り
- ③ 春鍬
- ④ 春田打ち

#### (3) 代表的な田遊び

- (ア) 板橋の田遊び・・・東京都板橋区
- (イ) 藤森の田遊び・・・静岡県焼津市
- (ウ) 蛭ヶ谷の田遊び・・・静岡県牧之原市
- (エ) 滝沢の田遊び・・・静岡県藤枝市
- (オ) 三島大社のお田打ち・・・静岡県三島市

(カ) 小國神社の田遊び・・・静岡県周智郡森町

2 田楽とは

平安時代中期に成立した日本の伝統芸能。楽と躍りなどから構成される民俗芸能の一つである。

(1) 田楽の歴史

田植えの前に豊作を祈る田遊びから発達したと伝承。渡来系のものであるとも言われ、不明な部分が多い。

(2) 三河の田楽

- ① 田峯田楽：田峯観音の祭りとして、毎年2月11日に奉納
- ② 鳳来寺田楽：鬼を供養する修正会として始まったと伝承。現在正月3日に田楽だけ独立して奉納。能など27番の曲を演ずる。
- ③ 黒沢田楽：俗に「墨付け田楽」あるいは「墨塗り田楽」と言われ、毎年2月第1日曜日に行われています。37番の曲を演ずる。

田峯田楽：昼田楽・夜田楽・朝田楽に分かれ演じられている。

昼田楽：8：00～10：00 神楽的要素を持つ舞。「扇の舞」「膳の舞」「湯桶の舞」「萬歳楽」「仏の舞」

夜田楽：16：00～20：00 豊作を祈願する予祝神事の田遊び。檜の幣串2本の間に鏡餅を「しきみ」の葉を挟んで「こうぞ」の皮で4ヶ所縦結びにしたモノを鉾に見立てて演ずる。「日選び」「堰さらい」「種選び」「雇人」「田打ち」「代播き」「代均し」「芽づら取り」「大足」「靱蒔き」「おしずめよなどう」「烏追い」「雇人」「芝刈り」「田植え」

朝田楽：21：00～22：00 田楽芸能。「庭固め」「火伏せ」「ちらし棒」「ろん舞」「あたま惣田楽」「から輪惣田楽」「殿面」「女郎面」「爺面」「駒」「獅子」「三拝・閉扉」

3 山中八幡宮「デンデンガッサリ」の実際

(1) デンデンガッサリの伝承

デンデンガッサリは、正月3日に山中八幡宮の御田植え祭りとして行われている。田遊びの歌詞の始めに「デンデンガッサリヤー」という詞があるところから、「デ

ンデンガッサリ」と呼ばれるようになったと伝える。

東海地方には、この種類の田遊びが多く分布する。田遊びは、その年の稲作の豊作を予祝するために、田作りの過程を模倣的に演技するものである。

(2) デンデンガッサリの行事次第

- ① 太鼓の乱打
- ② 田ごね
- ③ 前歌
- ④ 後歌
- ⑤ 弁当
- ⑥ 前歌
- ⑦ 後歌
- ⑧ 稲刈り
- ⑨ 運搬
- ⑩ 餅投げ



(3) 道具・準備するもの

- ① 弁当：白米4<sup>キ</sup>を年行事が炊き、櫃に入れる。
- ② 大鏡餅（稲）：下段11白、上段9白。
- ③ 丸餅（鎌）：14個(奉仕者分)+数個
- ④ 太鼓（田）：1個
- ⑤ 牛角・手綱：それぞれ1個
- ⑥ 注連縄1式：拝殿用

(4) 役名・扮装

- ① 太鼓打ち（神官）：2人＝白装束
- ② 歌い出し（音頭）：1人
- ③ 歌い手（衆）：11人
- ④ 牛：1人
- ⑤ 年行事：若干



(5) 歌詞・台詞・所作

- ① 前歌  
デー、デー、ガッサリヤー、

パッチキヒライテ ガッサリヤー

② 後歌

是カラ越テエエ

松阪越テサッサノサイ 松坂越テ ヤレ伊勢踊リ 伊勢衆ノクセニャアア

#### 4 瀧山寺鬼祭りの実際

##### (1) 修正会鬼祭り当日のタイムスケジュール

平成27年2月21日(土) ※括弧内は、調査者(野本・山口)の付け加え

- ① 8時30分 集合：冠面者、進行係(本坊に集合)
- ② 8時40分 着替え：冠面者(和服に着替え)
- ③ 9時20分 手拭作成：冠面者、進行係(1反より9枚取り=1.05反、5反、計45枚作成)
- ④ 10時00分 水汲み：冠面者、進行係、棒突(4名)(青木川へ風呂の水汲みへ向う。バケツ3個用意)
- ⑤ 10時10分 風呂の準備：冠面者(祖母面者が火付けを行う)
- ⑥ 10時30分 風呂入り：冠面者(祖父→孫→祖母の順に入る)  
1回目の迎え：大役、進行係(十二人衆の宿へ迎え)
- ⑦ 11時30分 2回目の迎え：大役、進行係(十二人衆の宿へ迎え)
- ⑧ 11時45分～12時30分 冠面者昼食：大役、御前(現在の山田住職)、進行係(冠面者昼食の接待を行う)
- ⑨ 13時00分～14時00分 火祭りリハーサル：冠面者、手引き、若衆、常チャレ(パンツ、股引き、足袋、手拭、誓約書を配布する。足袋、股引き、法被等借用品の返却を説明する。松明引換券を渡し、17時00分に松明と引換える)
- ⑩ 14時00分 着替え：冠面者、大役、若徒(行列用に着替えを行う)
- ⑪ 14時30分 3回目の迎え：大役、進行係(十二人衆の宿へ出迎え)  
仁王門へ送迎：冠面者、御前、若徒、棒突(組長)(タンキリ飴、三宝、箱提灯、十二人衆杖、大団扇持参)
- ⑫ 15時00分 登山行列出発：大団扇、若衆(大松明)、棒突、大役、若徒、長刀、12人衆、冠面者、僧侶、箱提灯、棒突(行列出発してからタンキリ飴配布)
- ⑬ 16時00分 本坊到着、十二人衆接待：大役、御前、進行係(本坊にて十二人衆の接待を行う)
- ⑭ 16時30分 棒突、火消、箱提灯担当者集合：棒突(9名)、火消(9名)、箱提灯(4名) (法被着用、点呼、役割説明—副総代)
- ⑮ 17時00分 本堂へ出発①：十二人衆、大役、進行係、棒突(6名)、火消(9

名)、箱提灯(2名)

- ⑩ 17時15分 十二人衆本堂到着:梵鐘突き(コツボネ)、牛木引上げ(火打ち)、大御幣仮固定  
本堂へ出発②:御前、若徒、冠面者、僧侶、棒突(3名)、箱提灯(2名) (本堂階段下で待機)
- ⑪ 17時17分 十二人衆1回目の呼出:十二人衆、大役、進行係、箱提灯(2名)、棒突(6名)(十二人衆整列)
- ⑫ 17時25分 十二人衆2回目の呼出:十二人衆、大役、進行係、箱提灯(2名)、棒突(6名)(十二人衆整列)
- ⑬ 17時30分 冠面者本堂へ入堂:御前、若徒、冠面者、僧侶、棒突(3名)、箱提灯(2名)(階段下の待機者は、十二人衆退去後、舞台正面より入堂する。僧侶の紹介)
- ⑭ 17時33分 十二人衆3回目の呼出:十二人衆、大役、進行係、箱提灯(2名)、棒突(6名)(十二人衆整列、登場後、大御幣建て)  
御前登場:御前、若徒、棒突(3名)、箱提灯(2名)  
仏前法要開始:大役、冠面者、若徒、僧侶 (本堂へ入堂)
- ⑮ 18時15分 御礼振り:十二人衆、進行係、箱提灯(2名)、棒突(4名)、松明2本、火消(3名)(舞台正面より東回廊から日吉山王社、東照宮から籠所へ戻る)
- ⑯ 18時30分 鬼塚供養:大役、御前、若徒、僧侶、冠面者、箱提灯(4名)、棒突(3名)  
豆・タンキリ飴蒔き:御前、冠面者(鬼塚供養が終わり次第、舞台より行う)
- ⑰ 18時45分 大松明点火:進行係、棒突(2名)、箱提灯(2名)、火打ち役、十二人衆、棒突(4名)、火消(9名)(火打ち役が内陣へ灯明から火種を移す)
- ⑱ 19時00分 庭祭り(田遊祭)開始:十二人衆、棒突(6名)、御前、若徒、箱提灯(2名)、棒突(3名)(棒突6名は、舞台ソデで、通路確保。棒突3名は、本堂にて待機)
- ⑲ 19時35分 御燈明取り:進行係、棒突(2名)(灯明で松明点火)
- ⑳ 19時45分 火祭り開始:大錫杖、錫杖、子ども松明(10本)、松明(20本)、祖父面、祖母面、孫面、棒突(3名)、火消(3名)(火消6名で大松明消火、場内消灯-2回目西次郎が終われば消灯。東西欄干角に棒突各1名、内陣1名、火消3名配置)  
檀家総代の拍子木で終了:場内点灯(照明係へ合図)
- ㉑ 20時00分 解散:法被、棒、箱提灯を本坊へ返却し解散  
上記タイムスケジュールの括弧内に記録者の簡単なコメントを記録しておいた

が、以下ポイントのみ詳しく記録をする。

## (2) 十二人衆の働き・役割

### ① 十二人衆とは

昔、滝地区に十二谷（集落）があり、谷の代表を十二人衆といったと伝承されている。この流れを受け継いでいるのが現在の十二人衆である。十二人衆は、もともとは世襲制であったと言われている。この制度は崩れる傾向であるが、現在も代々受け継いでいるイエも存在している。

鬼祭りは、十二人衆が主体となって執行される。江戸時代3代将軍家光によって東照宮が造営され、その後、安全祈願のために鬼祭りの復活の命が下った。これによって宇追ノ狭間に「祭り田」として2反5畝歩が与えられ、これを十二人衆で耕作し、その収穫をもって祭り執行の費用に充てたと伝えられている。

十二人衆は、鬼祭り執行のためには、重要かつ中心的な役割を担っていたと思われる。瀧山寺が、十二人衆を饗応するのに七度半（八度目に途中で出会う）の迎えを立てたと伝える。その際上役（東次郎・西次郎・コツボネ・福太郎・火打ち2人）6人は袴を着用し、下役（青モクサ）6人は羽織・袴を着用したといわれている。

現在は、寺からの迎えは3回行い、服装は、十二人衆の衣装を着けて饗応を受ける。庭祭り（田遊び）でのコツボネ・福太郎の呼び出しでもそれぞれ3回呼ばなければ出てこないのもその現れと思われる。

十二人衆は、鬼祭りを執行するに当たり、以前は、宿で旧正月元旦から7日間、女性を避けて、男性のみで精進潔斎をしたといわれている。現在は、宿（成瀬建設の旧事務所）で前日と当日の2日間、男手で精進潔斎をするように変わって来た。

#### 十二人衆の役

・長刀・・・東次郎

・長刀・・・西次郎

上役

・コツボネ・・・十二人衆の代表。鬼祭り執行責任者

・福太郎

・火打ち・・・・・・2名

.....  
・青モクサ・・・6名

下役

- ② 十二人衆の仕事（平成26年度の調査記録、平成27年2月15・20・21日の調査・観察記録と『鬼祭りと十二人衆』中根武夫 平成10年5月5日より）  
『鬼祭りと十二人衆』の著者中根武夫さんは、十二人衆の一人として、長く鬼祭りの伝承・記録に努力された方である。詳細な記録は、ご自身でコツボネ役等を長年務め、伝えてきただけに説得力がある。この成果を息子さんの中根守久さん

がしっかりと受け継いでいる。庭祭り（田遊び）の「旧正月七日修行 鬼祭歌之覚」も中根武夫さんが昭和59年1月改記されたものが現在、原本として引き継がれている。

### ● 大御幣づくり

コツボネ役があらかじめ美濃和紙50枚購入し、4つ切りにして使用する以前は、大御幣をすべて新しくしていたために大半の美濃和紙100枚を4つ切りにして使用した。現在は、雨等で大御幣が傷むか、大御幣の芯が破損したとき以外は、毎年大判和紙50枚を使用して、御幣を200程取り替えていく。年は、大御幣の芯の破損により、2本（東西に設置）の御幣を23年ぶりにすべて新しくした。1本の大御幣に御幣400枚が十二人衆の手によって心を込めて新しくされた。併せて800枚の御幣を新調した。長さは3尺程である。

### ● オンベづくり

大御幣の先端に飾り付ける七草のことをオンベと称す。七草は、榊の枝（長さ約45センチで2本）、黒松・赤松（長さ約20センチ、実生の松 各2本）、笹（長さ約20センチ2本）、シダ（なるべく小さいもの2本）、ヤブコウジ（2本）、ヒトツバ（2本）、ノキシノブ（2本）である。これは、本堂境内周辺で火打ち役の2人で東西に立てる大御幣の上にセットするために必ず2セット用意する。

七草は、榊の枝を除く6種類をオンベの巻紙で巻き、裂いた藤蔓で縛ったものを榊の枝に十字（横）に結び付けて大御幣の先端の竹に差す。

### ● 大松明用御幣づくり

大松明用御幣は、大御幣の紙の半分（大判の八つ切りの大きさ）にして、大御幣と同じ要領で2枚裁ち、本堂前東西の据える大松明につける。

### ● 牛木用御幣

牛木用御幣は、大松明用の紙をさらに半分にした大きさの紙で、同じ要領で2枚裁つ。牛木も東西大御幣の根元の部分に置くために2セット作る。

### ● オンベの巻紙づくり

オンベの巻紙は、牛木用御幣と同じ大きさの和紙で細かく切り込んで使用する。

### ● 大松明の縛り縄巻紙

大松明用御幣と同じ大きさの和紙で幅4センチの紙を24枚（閏月の年は26枚）作る。

### ● 牛木作り

幹の太さ、周り約15センチ、長さ約130センチの黒松と赤松を2本、ヤマから伐り出し、顔・角の形に切り揃える。顔の部分に錐で穴をあけ、切り払った枝で約10センチの横木（これが鼻環）を作ってこれを穴に通す。この横木と角の部分に裂いた藤蔓で結び、しおり縛りにして、牛木用の御幣をそれぞれ1本ずつ角

の部分に縛りつける。近年は、三浦さん（ご勇退）が一手に引き受けて作成している。（昨年、火打ち役の中根恵広さんが担当）

## ● 松明作り

大松明作りが、十二人衆の作業の中で最も人手を要し、全員が力を合わせなければ出来ない作業である。昨年の大松明作りの場면을再現しておきたい。

### －材料－

丸竹：太さ 並 長さ 3. 0 3寸（10尺）20本用意

細竹：直径3. 5寸 長さ3. 0 3寸（10尺）10本用意

松割木：大松明1本につき6 7. 5貫（18貫）、2本分で1 3 5貫（36貫）を用意。重さは、竿秤で正確に量られる。

### －作り方－

あらかじめ準備をしておくものは、まず丸竹の中で、真直ぐで丈夫なものを4本選び出しておく。これを大松明の心（芯）にする。続いて、丸竹を竹割器で割裂く。角材（盤木）4本、間隔をおいて並べる。さらに、編み縄の6寸（4尋）を4本、5寸（3. 3尋）を2本、4. 5寸（3尋）2本と仕上げ縄（3. 5分縄）1 2寸（8尋）を8本、1 0. 5寸（7尋）を6本、9. 7 5寸（6. 5尋）を6本、9寸（6尋）を4本（閏月の年は6本）を用意しておく。

次に大松明の外側の**簀子（大松明の皮と称している）編み**が始まる。縄で竹を編む者と縄の先端を持ってヨリをかける者が、角材（盤木）の位置で向き合い4組に分かれて簀子を編む。最初に、別に選び出しておいた細い**丸竹（心竹）**1本にあらかじめ太さに応じた長さの3分縄で一ヨリし、別の者が、簀子の幅の広い方から割竹を差し込んでヨリをかけ、順次割竹を差し込んで編む。途中松明を丈夫にするため、細い丸竹を3本ぐらい入れる。予定の幅になったところで選び出しておいた細い丸竹を使用して編み終わる。簀子の大きさは、幅の広い方が1 8 2寸（6尺）、狭い方は、1 4 1寸（4尺7寸）とするといわれている。同じ手順で簀子を2枚編む。

簀子を2枚編み終わったところで、いよいよ大松明作りに入る。簀子の幅の狭い方から3分の2ぐらいまで、竹枝5束縛り縄を解いて、枝の根を幅の狭い方にし、残りは適当に置く。

次に簀子の幅の広い方へ松割木6 7. 5貫（18貫を竿秤で量る）を入れる。竹枝と松割木を配置し終わると、簀子編みと同じように両方に分かれて向き合い両方から心竹を持って簀子を丸めるように持ち上げて心竹を合わせ、編み縄の余りの部分で心竹を潜らせて縛り、松明のように丸くする。

松明の形に整えて、**仕上げ縛り**にかかる。まず、編み目の箇所4カ所を、



あらかじめ長さを決めて準備してある3.5分縄を二重にして2周させ、心竹を潜らせて仮縛りをしておく。次に、太い方から編み目の3カ所の間は、それぞれ4等分し、細い方の編み目を1カ所の間は、3等分（閏月の年は4等分）にして、編み目の箇所と同じ要領で、仕上げ縄で縛る。順次締めると緩むので、初め仮縛りとし、順次締めていく。最後はしおり縛りにする。仕上げ縛りは、12カ所（閏月—3年に一度の年は13カ所—）にする。最後に太い方の部分に松割木の詰め直しと、細い方の竹枝の切り揃えをして大松明作りは終わる。

大松明が出来上がったところで、軽トラックに積み込んで本堂正面の集水枡の位置まで運び、太い方の部分を向き合わせ、しおり縛りを上にして、又木で斜めに据え付ける。据え付けが終わると、しおり縛りの部分に4センチ幅の和紙を巻き、糊で止める。最後に仕上げ縛りの余った部分を切り揃えて、大松明用の御幣を1本ずつ、一番太い部分の仕上げ縄の上部に縛り付けて大松明作りの作業は終了する。

平成28年は、行列用の大松明も作り変えるということで4本の大松明を作る予定であると聞いている。大変な作業と材料調達が大変であることが予想される。

この他に、点火用のジン（付け木）割りをし、火打ち役のひとが持ちやすいように縄または藤蔓で縛る。

作業が終了すると、本堂仏前に全員集合し、賽銭箱の上に御神酒・洗米・塩を供え、仏前で準備終了の報告と鬼祭りの無事執行を祈念してお参りをする。その後、御神酒・塩で外陣の四隅の柱・格子・大御幣・大松明をそれぞれ浄め、前日の作業・準備を終える。作業を終えると十二人衆は、宿に帰り、炊事係2人は、炊事を行う。以前は、宿で風呂も沸かし入っていた。現在は、食事、練習、打合せのみで、泊はしていない。

### ③ 宿での生活（平成27年2月20・21日の調査・観察記録より）

#### ● 十二人衆の食事

炊事は、前日の昼食、夕食および当日の昼食の3食としている。前日と当日の朝食は各自、自宅で自炊をする。

賄材料3食分を以下に記す。

白米・・・5 盃  
味噌・・・2 盃  
豆腐・・・10 丁  
アゲ・・・25 枚  
ネギ・・・4 盃  
ムキミ・・・2 盃

刺身・・・12人分  
清酒・・・2本（1.8割）  
タクワン漬け・・・3本  
茶・・・1袋  
茶菓子・・・適量

● 練習

炊事の係以外の者は、庭祭り（長刀振りは屋外、三門の下で）の練習を行う。特に歌の練習は、念入りにする。また、コツボネ・福太郎の所作と文言のあわせと呼吸を何度も確認していた。

● 入浴

以前は、風呂も宿で入っていた。前日の夕食後（当日は、昼食後）に長刀振り（東次郎または西次郎）から順次入浴する。入浴も大事な行事の一つとして大事にされ、全員が入ったとされていた。現在は、それぞれが自宅で風呂も入り、浄めてくる。

● 火祭りに至るまでの十二人衆の動き

十二人衆の衣装替えをし、3回目の迎えを待つ。

- ・コツボネ、福太郎、火打ち（2名）の衣装：縺子模様尾長鳥棧留縞帯手掛
- ・東次郎、西次郎：黒天鷲絨胴服赤地金襴股引
- ・青モクサ（下役6名）：素袍小烏帽子 ※天明2年の史料にも同様な記載

ア 十二人衆の迎え

大役は、3回目の迎えの時は袴を着用し、大小の刀を差して迎えの挨拶をし、十二人衆の準備が整うと、十二人衆と共に宿を出発し、仁王門へ向かう。

イ 行列

15時20分ごろに関係者は仁王門へ集合し、15時30分に仁王門を出発する。

ウ 行列の順序

棒突・大役・長刀・コツボネ・福太郎・青モクサ（太鼓）・若徒・僧侶・冠面者・棒突の順である。この行列の前に2本の大松明が近年復活した。若い衆30名余が若いエネルギーを発揮している。その時に、「瀧山寺鬼祭りの唄」が歌われる。以下記しておく。

- 1 見たかなア 聞いたかヨー 五穀の祈り ヤレヤレー  
今もなア 輝くヨー 鬼祭りよ
- 2 滝のなア 仁王門ヨー いつ来て見てもな ヤレヤレー  
逆さなア 垂木はヨー まだ知らぬよ

ホラホイ ホラホイ ホラホイ

- 3 めでたなア めでたのヨー 若松様はよ ヤレヤレー  
 枝もなア 栄えてヨー 葉も茂るよ  
 ホラホイ ホラホイ ホラホイ
- 4 滝もなア 開けたヨー 滝壺淵はよ ヤレヤレー  
 薬師なア 如来のヨー 御出ましたよ  
 ホラホイ ホラホイ ホラホイ
- 5 親はなア 無くともヨー 子は育つよ ヤレヤレー  
 祖父となア 祖母とのヨー 愛の孫はよ  
 ホラホイ ホラホイ ホラホイ
- 6 お前なア 百までヨー わしゃ九十九までよ ヤレヤレー  
 共になア 白髪 of ヨー 生えるまでよ  
 ホラホイ ホラホイ ホラホイ
- 7 薬師なア 如来とヨー 山王様はよ ヤレヤレー  
 八百なア 余年のヨー かが高いよ  
 ホラホイ ホラホイ ホラホイ

・ 十二人衆の饗応

行列が本坊へ到着すると、十二人衆は、別室へ案内され、御前（住職）と大役から挨拶を受けた後、御膳で酒食の饗宴を受ける。

献立は、皿（柿酢あえ）、坪（ヤマクチナシ）、平（生揚げ）、猪口（叩きゴボウ）、大引（ゴボウの筏揚げ・アオノリ）、酒、飯、汁である。

十二人衆以外の者は、大役以下それぞれ本坊で食事をする決まりになっている。

・ 本堂への登山

十二人衆は、17時、棒突きの先導で大役と共に本坊を出発し、本堂へ登山する。

大役は、本堂へ入り、十二人衆の代表のコツボネは、鐘楼で鐘を突く。本坊では、この鐘の音を聞いて拍子木を打って応え、御前（住職）を始めとする僧侶が本堂へ登山する。

・ 登山後の儀礼

十二人衆の内、火打ち役2人は、本堂表坂55段下に置いてある牛木を引き上げ、金柵の中の石灯籠の根本へ納める。

御前が本坊を出発すると、大役は、時期を見計らって本堂外陣の正面へ出て提灯を高く掲げ、十二人衆に声を掛ける。

十二人衆はこの時、大松明前に2列に整列し、大役の呼びかけに応える。  
**大役** 「谷の衆 行儀をよくなされ 追っ付け御前のお着きでござる」  
**十二人衆** 「エー」

十二人衆が応えると大役は、内陣へ入り、十二人衆は籠所で待機する。暫くして、御前（住職）一行が本堂へ到着すると、大役は外陣へ出て提灯を掲げ、十二人衆を呼び、十二人衆は前と同じように正面を向いて整列し、これに応える。

**大役** 「谷の衆 行儀よくなされ ただ今御前のお着きでござる」

**十二人衆** 「エー」

十二人衆が応え終わると、大役・十二人衆はそれぞれ元へ戻る。暫くして大役・十二人衆は、三度前回と同様に現れ、呼び、応える。

**大役** 「谷の衆 行儀をよくなされ ただ今御前のお出ましでござる」

**十二人衆** 「エー」

この時、御前（住職）は、若徒（小姓）を従え、外陣の正面へ出て十二人衆に 会釈をする。十二人衆は、御前に一礼すると直ちに二手に分かれて大御幣の所へ行く。

- ・ **大御幣立て**

**十二人衆** 「御祝」

と言って大御幣を立て、火打ち役が大御幣に打ち火をする。大御幣は金柵に縄で縛りつける。

御前（住職）一行は、再び内陣へ入り、法会を始め、十二人衆は籠所へ戻る。

- ・ **御礼振り**

17時50分頃十二人衆は、提灯・棒突・松明の先導により本堂裏の日吉山王社へ行き、東次郎・西次郎による長刀の御礼振りが行われる。その後、滝山東照宮の御神前においても同様に御礼振りをする。御礼振りの所作は、庭祭り（田遊祭＝田遊び）の長刀振りと同様である。御礼振りが終わると十二人衆は籠所へ戻る。

- ・ **鬼塚供養**

18時頃、法会半ばにして、棒突・箱提灯の先導で御前（住職）は、若徒を従え冠面者も随行して鬼塚供養の作法を行う。

鬼塚供養が終わると、御前（住職）たちは内陣へ入り、法会を続ける。

- ・ **大松明に点火**

法会の途中、鐘（中鐘）を合図に十二人衆の内、火打ち役が内陣へ入り、仏前の灯明からろうそくへ火を移し、提灯で大松明のところまで運ぶ。十二人衆は、あらかじめ準備してある松のジンにろうそくから火を移し、燃えるジンを大松明の松割木の間差し込んで大松明に点火する。

昔は、この大松明の明かりで庭祭りを行ったと傳承されている。

火消し役は、大松明が燃え過ぎないように藁の刷毛で水をつけて、燃え

具合を調整する。

• 庭祭り

19時仏前法要が終わると御前（住職）は若徒を従え、外陣の正面へ出て着座する。

この時、一山の僧侶の一人（昔は年行司）は、外陣の賽銭箱の上に登る。十二人衆の火打ち・青モクサは南天の木の杖を持って本堂正面の通路を挟んで東西に分かれ、向き合って配置につく。

※「 」の文言の後に字体を変えて記してあるのは、場面の観察記録である。中根守久さんの聞き取り調査及び中根武夫著『鬼祭りと十二人衆』を参照・引用した。

僧「西東次郎、オーン ソーウ ソーウ ソーウ」と呼ぶ。

暫くして、

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

十二人衆の一人（火打ち）が東次郎を迎えに行く。東次郎が出る頃、

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」と3回目を呼ぶ。

東次郎は、胴服を着て、右手に長さ2尺余、重さ12匁の長刀を持ち、左の腰に扇子を差し、左手を腰に当てて籠所を出て、大松明の間から正面に進み、舞台に上る。舞台の前方で止まって長刀の石突きをつけて、御前（住職）に一礼し、左手にて腰に差している扇子を右斜め前へ投げる。火打ちはこれを拾い、後で東次郎に返す。東次郎は、扇子を投げた後、斜め右に向いて右足を半歩踏み出しながら長刀を振り下ろして切る所作をする。次に斜め左を向いて左足を半歩踏み出しながら長刀で切る所作をする。続いて正面を向いて右足を半歩踏み出して正面を切る。切り終ると正面を向いたまま長刀の刀を左にして横に構え、長刀を右回しに7～8回廻して長刀を左手に持ち替え、刃先の方から腰にとって7～8回廻して腰に取る。この所作を3回繰り返して東に向きを変え、横に摺り足で長刀を廻しながら右へ数歩進み、次に左へ進んで長刀を腰に取って再び右・左へと動きながら長刀を廻す。これを3回繰り返し、最後に正面を向いて廻した後、石突きをつて一礼する。

僧「<sup>しんびょう</sup>神妙」

振り終ると長刀を右手で立て、左手を腰に当てて左に廻って舞台を降りて籠所へ戻る。東次郎の長刀振りは、東の悪魔祓いを意味するものである。

僧「西東次郎オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

暫くして

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

十二人衆の一人（火打ち）が西次郎を迎えに行く。

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

西次郎は、東次郎と同じ服装で、扇子を右の腰に差し、長刀を左手に立て保持し、登場する。舞台へ上がって東次郎と同じ所作をするが、東次郎とは逆で、左から始まり、長刀は左に廻し、向きは西向き、腰に取るのも右手で取る。西次郎は西の悪魔祓いをする。

振り終ると、

僧「神妙」

西次郎は退場し、籠所へ戻る。

僧「福太郎ー オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

暫くして、

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

火打ち役がコツボネを迎えに行く。

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

コツボネは、木で作った鍬を右肩に担いで素襖姿で出て来て、大松明のところで深く一礼した後、摺り足で進んで舞台（近年設置）へ上がり、中央よりやや前で止まる。鍬を担いだまま直立の姿勢で一言一言、力強く言う。

コツボネ「あっぱれ所や 好い所

年明け 春来たり

農事近うなったり

山王七社の御穀田に

薬師仏の御奉供田

御台衆の寄り田 耕田の

打って参らしょう

好い地は 一打ち打てば

いいの香のす

二打ち打てば酒の香のす

三打ち打てばいい酒の香のす

やがて年々の吉方へ向かって

福太郎を呼んで

ひっかけ打って舞らしょう

福太郎ー」

福太郎はコツボネが登場すると大松明のところで待機する。

福太郎は、鍬を左肩に担いで素襖姿で出て来て舞台上に上り、



コツボネの右から前を廻って左に並び鍬をコツボネの鍬にカチンと当てる。

福太郎 「やあー」

コツボネ 「あっぱれ所や 好い所」

福太郎 「好い所」

コツボネ 「年明け 春来たり」

福太郎 「春来たり」

コツボネ 「農事近うなったり」

福太郎 「なったり」

コツボネ 「山王七社の御穀田に  
薬師仏の御奉供田に  
御台衆の寄り田耕田の  
打って参らしょう」

コツボネは、鍬を担いだまま福太郎の前を左に廻ってその年の吉方（歳徳神の方角、毎年変わる）を向いて止まる。

福太郎 「我らもさらば 打って参らしょう」

福太郎は、鍬を担いだまま左に廻り、コツボネの前を通過して左に並ぶ。福太郎が止まると、コツボネは右足を半歩前に出し、鍬を右手を前に持って構える。福太郎も同時に左足を半歩前に出し、鍬を左手前に持って構える。所謂、田打ちの所作の構えをする。

コツボネ 「好い地は 一打ち打てば いいの香のす」

「いいの香のす」と言いながら鍬を振り上げると同時に右足を高く上げ、一歩踏み出し、鍬を振り下ろして田打ちの所作をする。

福太郎 「ほうとする ほうとする」

「ほうとする ほうとする」と言いながら左足を上げて踏み出すと同時に鍬を振り下ろす。コツボネの「いいの香のす」と福太郎の「ほうとする」が同時に終わる。

コツボネ 「二打ち打てば 酒の香のす」

福太郎 「ほうとする ほうとする」

コツボネ 「三打ち打てば いい酒の香のす」

福太郎 「ほうとする ほうとする」

コツボネ・福太郎は、同じ所作を3回行って後足を前足に揃える。コツボネは、鍬を右肩に担ぐ。福太郎は、左肩に担ぐ。コツボネが先に左に廻り、元の位置で正面を向いて止まる。続いて福太郎も左に廻り、コツボネの左に並んで止まる。

コツボネ 「田を打つ牛は」

福太郎 「べぼう べぼう」

コツボネ 「あっぱれ牛や 好い牛や 好い牛は一打ち打てば 三はね跳ぬる」

福太郎 「三はね跳ぬる」

コツボネ 「代はかえつ 苗代草を散りぢり花々とひろげ」

と言ってから、コツボネが先に廻り出し、続いて福太郎も廻って吉方へ向いて止まり、田打ちの時と同じように鍬を構える。

コツボネ 「大足に踏んでとう とう」

福太郎 「小足に踏んでとうとう」

田打ちと同様に鍬で打つ所作をする。コツボネが「大足に」と言ったらすぐに「小足に」と言い出し、「とうとう」が同時に終わる。

コツボネ 「大足に踏んでとうとう」

福太郎 「小足に踏んでとうとう」

コツボネ 「大足に踏んでとうとう」

福太郎 「小足に踏んでとうとう」

同じ所作を3回繰り返してから、コツボネから廻り出し、元の位置で正面を向いて止まる。

コツボネ 「苗代は ひっ下水口をふさぎ 上水口をあけ 苗代水をさらさらと」

福太郎 「心のままに」

コツボネ 「山王七社の御穀田に よし早稲の種千万石

薬師仏の御奉供田に 福萬石の種千万石

御台衆の寄り田耕田の幸々節の種千万石をずうと取って参った」

「・・・福萬石の種千万石」まで止まったままで言う。「御台衆・・・」からは廻りながら言って、「・・・取って参った」をコツボネの左で止った時に言う。続いてコツボネ・福太郎は、田打ちと同じように廻って吉方へ向いて止まる。

次に種蒔きの所作に入るため、コツボネは、鍬の刃の部分を下にして柄の刃の部分よりやや上を左手で持ち、福太郎は、鍬を同じように右手で持って種蒔きの構えをする。この時、鍬の刃先は体の方へ向ける。

コツボネ 「山王七社の御穀田によし早稲の種千萬石」

右足から一歩踏み出し、「山王七社・・・よし早稲の種千萬石」と言いながら右手で種蒔きの所作をする。

福太郎 「とーう とーう とーう」



左足から一步踏み出し、左手で種蒔きの所作をする。コツボネの「山王七社・・・よし早稲の種千萬石」と福太郎の「とーう とーう とーう」が同時に唄い終わる。以下、2人の掛け合いの場面はすべて同じ終わり方をする。

コツボネ「薬師仏の御奉供田に 福萬石の種千萬石」

福太郎 「とーう とーう とーう」

コツボネ「御台衆の寄り田耕田の 幸々節の種千萬石」

福太郎 「とーう とーう とーう」

コツボネ・福太郎は、それぞれ鍬を肩に担ぎ直して正面を向く。

コツボネ「♪春の初めの種おろし 待ちに満束せまちに千束 とずき  
ますずき 寸の稲坪 石にかなめ 福太郎米かみ♪」

唄い終わると同時に、コツボネは、太鼓を一つドーンと打つ。

福太郎 「はら はらかたや」

コツボネ「農人の事なれば 鍬をまくらに昼寝をしよう」

この時、火打ち役は、舞台へゴザを敷く。コツボネは、言い終わると鍬の柄先が頭の方になるように鍬を下に置き、鍬の柄が枕になるように体の右を下にし、横向きで斜め横の体勢で寝る。

福太郎 「我らもさらば昼寝をしよう」

福太郎は、コツボネとは逆の位置に鍬を置き、体の左を下にして横向きに寝て、右足をコツボネの足に絡ませる。

コツボネ「♪年好し 世好し 所好し 年由し 世由し 今年由し  
年よし 世よし なるわいよし 稲なる笹は 稲となる  
福太郎の大ねなし♪」

コツボネの唄の文言は、寝言のようにゆっくりと唄う。ただ、「なるわいよし」から早く唄い、「稲なる笹は・・・」を唄いながら起き上って「福太郎の大ねなし」と唄って左手で福太郎の腰を打つ。福太郎は、打たれて起き上る。そして、両人は鍬を担いで元の姿勢に戻る。



福太郎 「はら はらふくれ」

コツボネ「さーらば 苗見に行こう」

コツボネ左へ廻って吉方を向く。

福太郎 「我らもさらば 苗見に行こう」

福太郎左へ廻ってコツボネの左横に並ぶ。

コツボネ「あっぱれ苗や 好い苗や いいもり苗に 植えば立ったり」  
「・・・植えば立ったり」と言い終わると右足を半歩踏み出し、  
左手をかざす。

福太郎 「植えば立ったり」

福太郎は、左足を半歩踏み出して右手をかざす。この後、両人  
手足を戻し、左に廻って正面を向く。

コツボネ「♪飯司の早乙女千萬人 福司の早乙女千萬人  
富司の早乙女千萬人 三千前に物の具をそえて  
おと一う前も化粧してずーと参れ♪」

福太郎は、左へ廻って西南を向いて止まり、

福太郎 「♪飯司の早乙女千萬人 福司の早乙女千萬人  
富司の早乙女千萬人 三千前に物の具をそえて  
おと一う前も化粧してずーと参った♪」

「富司の早乙女千萬人」まで止まったままの姿勢で唄い、「三千  
前・・・」から左へ廻りながら唄い、「・・・ずーと参った」を  
唄い終わるとコツボネの左に並ぶ。

コツボネ「早乙女も参ろう 朝から苗を取ろう」

コツボネは、太鼓の位置へ進んで撥を持ち、福太郎はコツボ  
ネの後ろに、他の10人は、コツボネの声に応じて舞台上上っ  
て太鼓の前に集まる。コツボネは、次の唄を唄いながら太鼓を  
打って拍子を取る。他の者は太鼓の拍子に合わせて唄う。

唄 「♪朝苗をと一るには一 さ一はらよ一のな一え一 ゆか一や  
手一に手一ど ゆ一くよの一」

コツボネは太鼓を打つのを止めて、

コツボネ「苗は取つ 代鋤を合わせ 植えて参ろう」

コツボネは、再び太鼓を打つ。

唄 「げ一人り一人と一うん と一びんが一原田を植え一中一へか  
一いれ一るな一を さ一かえ行くよの一」

コツボネ太鼓を止める。

コツボネ「西の海へかかって かきはまぐりを取って 都めぐりをしよ  
う」言い終わると再び太鼓を打つ。

唄 「♪西の海一や 西の海一や  
か一きはまぐり めなごの か一きはまぐり めなごの

なーるとのー わかめな  
ごのー なーるとのー  
わかめなごの

一何に駒にーやー 何に  
駒にーやー たーづなを  
ー かけてなごの たー  
づなをー かけてなごの  
おーぐしまを めぐるな  
ごの おーぐしまを め

ぐるなごの のーりしずう めたるなごの のーりしずう めたる  
なごの あまにといしやー あまにといしやー みーやこへ なび  
けなごの みーやこへ なびけなごの 我れもなびかーやー 我れ  
もなびかーやー 青いくもーのーたなびくーは こーのりかーやー  
水晶のー たなびくーは ほしかとーいう しゅげめよいかーや♪」



以上で唄が終わる。

コツボネ「当年のお祝いこれまで」

唄い終ると一斉に舞台を降り、東次郎・西次郎は、大松明の所まで下がり、他の10人は、元の位置に戻る。

東次郎が出て来て、最初の長刀振りと同じように東を向いて振る。東次郎が振り終ると、御前（住職）・若徒は内陣へ入る。続いて西次郎が舞台上って西に向いて長刀を振る。この時に、火祭り進行係の小原さんが灯明から火種を持ち運び、日吉山王社前で白襦袢姿で松明をもって待機している若衆の松明に点火をする。

#### ・ 火祭り

西次郎が長刀を振り終って石突きが地につくと、これを合図に大役が拍子木を打ち、同時に燃え盛る大松明を倒し、水をかけて火を消すと共に境内の照明も消す。

内陣では半鐘、双盤、太鼓を乱打し、法螺貝を吹き鳴らす。この音を合図にそれぞれの鬼に2人の手引きがつき、本堂東の浜縁から登場し、火祭りが始まる。

最初に孫鬼が右手に小鉞、左手に手松明を持って登場する。続いて祖父鬼は、右手に大鉞、左手に手松明を持ち、祖母鬼は右手に撞木、左手に手松明を持って現れる。これに続いて手拭でほお被りし、白襦袢姿で松明（普通の松明）を持った若い衆十数人出て来る。

孫鬼は、正面西の擬宝珠に上って右に廻って外陣へ入り、浜縁へ出て東の

擬宝珠へ上がり、欄干を西へ三度渡る。正面の欄干の切れ間は、手引きが掲げて渡る。西の擬宝珠に立ってから外陣へ入った時に小鉞と手松明を大役に預け、鏡餅に持ち替えて廻る。

祖父鬼・祖母鬼と松明持ちは、浜縁を東から西へ、そして外陣へ入って浜縁へと右回りに廻り、祖父鬼・祖母鬼は、孫鬼が鏡餅に持ち替えた時に、鉞・撞木・手松明を預け、それぞれ鏡餅に替える。三鬼とも鏡餅を体の前に持ち、左右に回しながら廻る。

孫鬼が三度目に西の擬宝珠へ立った時、拍子木を打ち、これを合図に鐘や双盤等の鳴り物が止む。松明持ちは、各自の松明を本堂前両脇の大天水桶に投げ入れる。火消し役は、外陣・浜縁に落ちた火に水をかけて消す。これで、総ての祭事は終わる。

### (3) 「三州瀧山寺人日法会記」(蓬左文庫所蔵)の検討

天明2年(1782)当時の修正会鬼祭りをきめ細かく記録(根岸住の石原季隆記)されているもので(2)の登山後の儀礼と比較・検討してみることに、伝承の姿・形が明らかになると思われる。

#### 凡例

- |  |
|--|
| <p>(1) 編者が加えた注記は、すべて( )で示した。</p> <p>(2) 漢字の字体は新字体を用いた。</p> <p>(3) 文意の通じない箇所は(ママ)、なお疑問の残るものは(一カ)と、それぞれ右傍らに注記した。</p> <p>(4) 読みやすくするために、読点(、)を施した。また、難しい漢字については、適宜ルビを施した。</p> <p>(5) 原史料中の割注は、すべて( )の中へ入れた。</p> |
|--|

(表紙)

「三州瀧山寺人日法会記」

瀧山寺人日法会記

三州額田郡滝村(御当家江創業の頃同国滝脇の城主本多伊勢守領せし地なり、今も同村下市場と云所の此の山添に高き処に伊勢守陣屋の跡とて残れり、俚俗呼て伊勢屋敷と云、見るから石罫など尋常のものに非ず、当時百姓小右衛門と云者居住す)吉祥陀羅尼山瀧山寺(天台宗にて江戸都東叡山寛永寺御末にて寺領六百十二石)御山上に神君の御宮鎮座まします、御別当を清龍院と云ふ(此山往古役の行者踏分しとて修験の僧徒往して真言宗なりけるか何のころにか断絶しぬ、其後正保年中大師の御弟子亮盛法印住職有りてより以来、当時に到る迄、百四十年法脉連続ある)

とそ) 同山に御本地堂と云ふ有、本尊薬師如来(御丈五尺余台座厨子入作  
不知、伝説に往古役の行者此所より西なる下流を渉る折から河上より一  
ツの蓮花流れ来れるを見て(下市場に渡せる御橋の下流にて今蓮花沢と  
云) 此奥に霊場あらむと尋ね登り遥の源谷滝上と云ふ、溯に來り、錫杖を  
以て滝壺を探るに(滝壺四ヶ所有り一の釜二の釜三の釜どべの釜と云、  
行者の探りたるは

一乃釜なりとかや) 薬師仏(御丈一寸八分) 行者の突ける錫杖に取付けて  
上らせ給ふ、此仏を今の本尊の胎中に籠て共に厨子に秘て安置す、又厨  
子の外にも座像の同仏有り、衆人結縁のためとて安置す、是世に伝える  
前立仏なり、此外十二神観音勢至不動毘沙門等左右に双立あり(共に毘  
首鞞摩の作) 此本地堂に例年正月七日の夜法会有(是を俚俗鬼祭と云) 鬼  
の伝説末に記す、是に預かるの徒十二人、上役六人・長刀振二人・田打二  
人・火打二人此内にて主宰の者を横座と云、下役六人末に記す、此者共に  
神田六石を与え置ける、東の方へ三石五升、西の方へ二五九斗五升也、東  
の方五升多きハ正月六日にある<sup>(ま)</sup>しする故とかや、先ツ前年の十一月其他  
十二にてたかひに饗の品々あり、同月七日に東乃かたにて饗し、同十五  
日に西の方にて饗す。此日神田の米にて作れる酒(醪<sup>とびれん</sup>酒なり) 是を酌  
んで祝ひ、調彩の魚肉ハこのしると云魚一程にかきりて他乃魚を用ゆる  
ことなし、本来此饗は十二人のもの己々か妻を饗ことこの権輿なり、是  
ハその夫正月朔日より七日まで別火を成す、その会釈とかや、妻を見し  
て先へ行を尻つきと云ふ(今ハ此事廢せり) 既に正月に至て十二人の者  
共朔日より七日まで同火を忌ミ潔齋を為す、六日に及んで東の方六人の  
許へ、西のかた六人行集りて、七日の法会の学ひを成す、此日去年作りた  
る濁酒を残し置取出て饗ことなり、同七日の御別当の許にて彼等を饗さ  
れこと有り、此折から饗膳の役ハ古式にて代官これを勤む(是を膳引と  
云ふ) 尤上下の役乃座席饗膳等差等有り、且もてなしの時刻能とて彼等  
かたへ使を走ること七度半なりと云、半とは彼等と使と途中にて引逢ふ  
やうに出て來るとぞ、是ハ古乃ことにして今ハ使を走ること兩度にて、  
七度半のことハ言葉にて述かばかり世、猶十二人のもの三鬼の役の者の  
外に法会の奉行と云もの二人、そのほかもろゝの役あり末に記す、さて  
法会の日に当て十二人のものを初として都而法会にあつかるものハ、御  
宮本坂の下なる谷川(俗にとゞめきと云ふ)にて垢離をとりて登山す、扱  
当日の黄昏ころに及んで御地堂の前なる撞桜堂乃鐘を撞く、是を度とし  
て御別当青龍院を初として五坊の衆徒(觀量院・密巖院・玉泉院・淨蓮  
院・常心院)共に東坂より登山して御本地に入らる、即時に青龍院堂前に  
着座有ると、本坂の上なる柵門の内のかた東西、太サ五寸廻りばかりに

長サ五六尺斗もあらむ女男の松を枝葉共に損せぬように伐採てる、その松の末の端に穴を明け、藤かつらを通して六七斗の横木を詰付、是を牛木と号て東西に一本宛双置（是ハ正月六日に松迎とて山にて伐出し、期のことく、拵て本坂五十五段の下なる東西に建置、今日此ところへ上る也）其傍に大なる幣帛一本宛有るを一本に郷民六人宛懸りて東西目を見合て、同音に御祝ひと云ふて一時に立る、其下に殿原と云ふもの二人（麻上下着用）居て平伏す（これ御祝ひと云へるの会釈とかや、此幣こときに立るとハ云ひなから東乃かたを少シはやく立る古式とぞ）立終ると火打ちの役人として二人（縹子模様尾長鳥棧留縹帶手掛<sup>(杖カ)</sup>）着服す（この帶手掛<sup>(杖カ)</sup>と云へるものハ頭に纏ふて下ける赤色の細布なり、申樂の狂言にみる婦女の頭に似たり）このものとも東西へ別れて石鎌を以て幣帛へ清めの火を打懸る、又同所の東西に大松を立終る清龍院を初として衆徒残らす内陣に入て、仏前にて勤行誦経等あり（薬師の真言、不動の真言）なりとかや（この勤行洛陽叡領の坊中無動寺にのみ有て、他にあることなし、故有て此御寺に襲ひ修す）この勤行のいとまに御本堂の後に鎮座有る山王社の広まゑの砂上にて長刀を振ること有り、長刀振と云ふもの二人（黒天鶯絨胴服、赤地金襴股引）着服す、是に下役とて六人（素袍を着し、小結烏帽子也）後見として随従す、長刀二振（無銘然とも先年その職のもの研て見て一振ハ小鍛冶宗匠、一振ハ波平行安なりと云々けるとそ）振初乃とき扇ぬきて後見に渡し、社に向て長刀を載き夫より長刀を車輪に振り後より前へ廻して取り、力石を踏こと両度、その後横に走りながら振ること両三度なり東西と号して一人ハ右へ振り、一人ハ左に振る、振ること兩人にて両度なり、振り終てまた神君御宮の広まへ乃砂上にても振る、振ること山王社前の如し、振終て御本地堂の前なる籠所へ退く（長刀振りハ無言にて囃せる鳴村もなし）猶仏前の勤行いまた終らぬ中に衆徒一人煎りたる五穀を五ツ包ミわけ器に入れ、小さき幣を取添へ承仕待なと召具して堂前の西のかたに有る朱のまがき籬<sup>まがき</sup>のもとへ持行き（方六尺四方斗に囲て内に大石有り）これを鬼矢来と号、（俚俗の説にむかし同国鳳来寺にも鬼面ありけるに、鳳来寺領乃郷民と瀧山寺領の郷民と集りて、たかひに鬼面の靈なるを争い、ひたすら瀧山寺乃かたハ靈なしと云けるに、瀧山寺のかた憤りて、しからハ爾曾肉と喰ふて此面を冠らむやと云へば、鳳来寺のかた心得しとて其ことくして面を冠りぬきて攪<sup>ま</sup>に口す、さればこそ見よや仏罰のゆへにたちまち鬼に成たるハとて、皆々集り此処へ埋んと云えば、渠悲んで詫けるを皆云ふ、尔埋<sup>ま</sup>らて後その墳乃上に煎りたる五穀を蒔んその五穀乃芽を出すときにしよと欺て終に土中に埋しとかや、又一説に往古此瀧山乃あたりハ魔所にして魑魅人民を悩せし

ゆへ捕て土中に埋しと云々、二説いつれか実なるを知らすなから神秘の伝説誣へからすといへともおもふに、此所函谷にして山嵐瘴疫の氣盛に独陰乃地なるかゆへ、いにしへより専追儼乃遺風を行ふなるへし、しはらく誦文を護持して後五ツ包乃物を悉く籬の内へれ終り、幣を立て猶器の内に別に包=ざる五穀の有るとも籬の内へ蒔るゝ也(此五穀と蒔くこと正月朔日、四日、七日と都而三度也)その修法の間承仕侍ども螺貝をふき続ける也、修法終えて衆徒内陣に帰座して、猶一同に行道なと有り、内陣の勤行終て後御別当堂前へ出らるゝ、此時参詣の警固として下役六人杖やうの長きものを持て(是を金剛杖と云、檜乃杖なり)東西へ分て二列に蹲踞さす(外に法会勤るものゝ非常を奉行するものとして、二人麻上下にて出る、是を殿原と号すとかや)暫有て衆徒の内觀量院(留守居の役僧)御別当の座せる後なる賽銭箱乃上にあかり鉦の緒に取付て、立なから大声を發して西東次郎そうゝと呼ふ、呼ども答す、すこし間をおきて、又そうゝそうと呼ふ、然すれとも答す又すこし間をおきて此度ハ一調高くそうゝそうと呼とき其聲に應ふして籠所より長刀を持出、御本地堂の正面の階下乃広庭の砂上にて振る(右に振る也)振終ると觀量院声をしつめて神妙と云ふ、云ゝ終ると退て籠所=入、しはらく有りて、又觀量院声を發て、西東次郎そうゝと呼ふ、呼こと前のことく三度にして、また壺人籠所より長刀を持出て振る(此度のものハ左に振るなり、此振やう、装束等山王社前にて勤たるかことし)振終ると觀量院神妙と云ふこと前のことし、云ゝ終ると退て籠所に入(或説に西次郎東次郎 □ 兩人なり、わけて呼へきを言葉のつゞきあしき故、混して西東次郎と呼とぞ)其後又觀量院声を發て、福太郎そうゝと三度呼こと、西東次郎のことし、呼終ると福太郎なるもの鍬をかたけて(此鍬ハ柄を黒塗にして、鍬の先ハ銀にてだミたるもの也)籠所より出て階下に来る(是を田打と云、装束火打乃役と同じ)堂の正面に向いて曰

年明け、春來り(農時近う)のふときちかふなったり、山王七社(御穀田)のミこくてん(仏)薬師(仏)ほとけ(御奉供田)のこぶくてん、み(御台衆)たい(審田耕田)し(打)う(參)乃よりてんかうてん(打)のう(參)つてまいらせう、よい(良い地)ぢ(打)ハ(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ハ(打)い(打)ゝ(打)乃かの(香)、二(打)タ(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ば(酒)さ(香)け(香)のかの、三(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ハ(打)ゐ(打)ゝ(打)さ(打)け(打)のかの、やか(香)て(香)とし(向)ゝ(年々)の(吉方)き(向)つ(向)ほうへむ(向)か(向)つて

福太郎と呼んで、ひ(打)つ(打)か(打)け(打)う(打)つて(打)まいらせう、福太郎と呼ふその時同し出立のもの鍬をかたけて、ヤアと答て籠所より出て来る(初め出たる名ハこつぼめと云ゝ、後に出たるハ福太郎なり、伝説にこつぼめハ親也 □ 也、福太郎ハ子也弟也と両説なり、いつれか是なるを不知、又異説に後に出たるハ福太郎、先に出たるものハ別名あれとも、いとむかしきゆへ、古より二人ともに福太郎と呼ひ来れりとぞ)二人立双て、こ

つぼめ日

こ あっはれ所や、よい所、年明春来り(農時)のふとき(近)ちかふなったり、山王七社の(御穀田)みこくてん薬師(仏)ほとけの(御奉供田)こふくてん、みたいしうのよりにてんかうてんのうつてまいらせう

(福太郎云)

われらもさらばうつてまいらせう

(かく云)なから前なるこつほめを一へん廻り、もとの所へ立ツ)

こ よ(良)ひ(地)ぢ(打)ハ(打)ー(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ハ(打)い(打)の(香)かの

福 ほ(う)ふとするゝ

こ 二(打)タ(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ば(酒)さ(香)けの(香)かの

福 ほ(う)ふとするゝ

こ 三(う)う(う)ち(う)う(う)て(う)ば(いい)あ(酒)ゝ(香)さ(香)けの(香)かの

福 ほ(う)ふとするゝ

こ 田(打)を(打)う(打)つ(打)牛(打)ハ(打)

福 べ(う)ぼうゝ

こ あ(良)っ(良)は(良)れ(良)牛(良)や、よ(良)ひ(良)牛(良)や、一(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ば(打)三(打)は(打)ね(打)は(打)ぬ(打)る

福 三(踏)は(踏)ね(踏)は(踏)ぬ(踏)る

こ しろ(う)ハ(う)か(う)多(う)つ、苗代草をば(散)ち(散)りゝはなゝとひろけ大足(踏)ふ(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ゝ

福 小足(踏)に(踏)ふ(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ふ(踏)ゝ

こ 大足(踏)に(踏)ふ(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ふ(踏)ゝ

福 小足(踏)に(踏)踏(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ふ(踏)ゝ

こ 大足(踏)に(踏)ふ(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ふ(踏)ゝ

福 小足(踏)に(踏)ふ(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ふ(踏)ゝ (こゝまで福太郎前乃ことく廻りて立ツ)

こ 苗代ハしつ下(水)み(水)な口をふさき、上(水)ミ(水)な口をあけ、苗代水(水)をさうゝと

福 心のまゝ

こ 山王七社の(御穀田)みこくてんに、よし(早稲)わ(種)せのたね千万石、薬師(御奉供)仏乃(御奉供)こふく(福)てん(万石)に(種)ふくまん(種)こく(種)のたね千万石、み(御台衆)たい(寄田)し(耕)うのよりにてんかうてん(奉)にかうゝふ(種)しのたね千万石、すいと取てまいれ

福 山王七社の(御穀田)みこくてんに、よし(早稲)わ(種)せのたね千万石、薬師(御奉供)仏乃(御奉供)こふく(福)てん(万石)に(種)ふくまん(種)こく(種)のたね千万石、ミ(御台衆)たい(寄田)し(耕)う乃よりにてんかうてん(奉)にかうゝふ(種)しのたね千万石、すいと取て(奉)まい(奉)った (と云て此所にて又廻る)

こ 山王七社の(御穀田)みこくてんに、よし(早稲)わ(種)せのたね千万石

福 とふぶゝ



こ 薬師仏の(御奉 供 田)こふくてんに、よしわせの(早稲)たね(種)千万石

福 とふぶゝ

こ はるのはしめ(春)の(始)たね(種)おろし、まちに(万 束)まんぞく、せまちに(千 束)せんぞく、  
とずき(斗 換)、ますずき(寸)、すん(す)のいな(種 粒)つぼ、石にかなめ、福太郎米かめ、  
はらあゝふくれ(腹)、農人のことなれハ、鍬を枕に昼寝をせう(年)、としよ  
し(世)、よよし、所よし、としよし、よよし、ことし(今 年)よし、としよし、  
よよし、なりわいよし、稲なるさ(笹)ゝハ稲となる、福太郎の大ねなし  
福 はらあゝかたや (又廻る)

此所筵一枚の上に兩人とも寝る、こつぼめさきへ起て福太郎を起す所作あり

こ 苗見(行こう)にゆかふ

福 われ(我)もさらは苗見(行こう)にゆかふ

こ あっはれ苗や、よひ苗やいゝもり(苗)なえ(植え)にうゑば立り

福 うゑ(植え)ば立たり

こ い(飯 塚)ゝつかの早乙女千万人、ふく(福 塚)つかの早乙女千万人、とみ(富 塚)つかの早  
乙女千万人、三千まいも物の(具)ぐ添て、おとふま(前)ゑも(化粧)けせうして、  
ずいと取て(参)まいれ

福 い(飯 塚)ゝつかの早乙女千万人、ふく(福 塚)つかの早乙女千万人、とみ(富 塚)つかの  
早乙女千万人、三千まいも物の(具)ぐ添て、おとふま(前)へも(化粧)けせうして、  
ずいと取て(参)まいった (と云て又廻る)

こ 早乙女か参ッたら、朝アから苗を(取)とろと云ふて、こつぼめなるもの  
階下に有る太鼓を打てうたひ出すと長刀もてるものに、下役に  
都而

十二人一所へこそり集りて一同にうたふ

うた 朝苗取るはさワらよ(苗)のなゑ(参)、いかやてにての、ゆく(歌)のよ

辞 苗ハ取たで白鍬あわせて、う(植)ゑ(参)てまいらせう

うた けんりんり(栄)ィん、とうとんびんから、田アをう(植え)ゑ(参)、なかへかゑれ  
よ、なも(世)さかゆく(行)よの

辞 西の海へかゝって、か(牡 蠣 蛤)きはまくりを取て、都めくりをせう

うた 西のうみやゝ、かきはまくりめなごのゝ、何こまにやゝ(駒)、たつな  
を(手綱)かけてなごのゝ、あわ(阿波)のなるとの、わかめなごの、おふぐしまめ  
くるなごのゝ、のりしつめたるなごの、あま人とへや(都)ゝとへ(都)なび  
けなごのゝ、われもなひかよゝ、あをい雲のたなひくハこふのり  
かよ、すいせうのたなびくハほしかとよ、しげめゆひかよ

辞 当年乃御祝ひこれまで

この二人乃昔声所作まで大凡ワサヲキとも云か、むねなり、うたも辞も

風土の方言多クして聞知かたきことのミうたハまたく催馬楽と聞ゆ、予此者との云へる祝辞うたなどこまやかに誌さんとおもえとも、能くむしかたることのなし、よてかすゝの人をたのめて猶法会の主宰たる（横座の一なり）八郎左衛門と云へる百姓当年にて七十有余才、法会にあつかること四十年なりとそ、此ものにたより尋しに、神秘とていにしへより其徒の外他に伝えることを禁すればとて、かたく許さりしを、ふかくたのみ、ひたすら歎ければよふやくに心とけて語り聞せぬ、

斯して田打終ると観量院又神妙云ふ、云々終ると田打ち退て籠所に入ると、ひとしく御別当を初め急て退座ある、此時堂内にて拍子木を打ツ、是を度として二堆の大松明に手桶の水を打かけ、一時に消す、消ゆると堂内より郷民百人ばかり（縹絆着素足也）手毎に小き松明をとほし連て、堂内にて鬼を追出し追廻す、追出すに應して螺半鐘太鼓を乱調に打立る、又鬼の先へ郷民壺人大なる錫杖を振出て踊り歩行く（この錫杖ハ役の行者の持たるとて、重サ米俵目有り）さて鬼の役ハ三人なり所謂祖父鬼「鏝を持、これを親面と云ふ」祖母鬼「鉄杖を持是を姥面と云ふ」孫鬼（鏝を持、是を孫面と云ふ、三鬼共に装束猩々緋胴服黒天鷲絨股引着す）子鬼の面ハ前に記せし鳳来寺の者に冠らせて土中に埋たりとぞ、三ツの面（作毘首猩摩）これを面とはいへとも、いつれも鬼の頭なり、空頂なるものにこなたの首をさし入て冠りなり、祖父鬼・祖母鬼ハ例年籠所役人承仕と云て鐘など撞くことを司る、松田大隅・中根丹波と云へる二人のもの勤む、孫鬼ハ地下のものとして郷民ある召仕のものなど年々代りて勤む、しかれとも（召仕なども他領のものにハ許さず）祖父鬼・祖母鬼にハ手引とて郷民二三人ツゝ附添て廻る、孫鬼をハ郷民三人はかりにて木偶を遣ふことくして堂の内外あるハ廻りに建る、欄干など走らす三鬼のうち祖父鬼・祖母鬼ハ追ものも共に、堂内を三遍外トの階上を三遍、都而六遍廻るなり、孫鬼ハ是に一遍半多く都て七へん半廻る也、其のち三鬼走りて御本地仏の前に飾られる備餅（中に六ツ重ね左右に四ツ宛都て十四なり）上なる三ツを手毎に一つ宛奪ひ取て堂内を走る（この手毎に奪ひし餅ハ三鬼のもの己々の方へ持帰る也）されば堂内に輝ける炬火ハ星のことくして夥しく、人声ハ貝鉦に和て喧し（是にも火を消す、役民ありてあたりに落散たる火を消して廻る）果にはこの松明を残らず堂内の真中へ投する、投終ると傍らより手桶の水を打灌き悉く消せば、鉦鼓乃音も止ミ闇夜となりて法会終んぬ

鬼を追ふ 法乃灯や 山笑ふ

此書恐失法会之実故以国字誌芻蕘之方言干時天明二壬寅年正月東武台嶺之北根岸之邑子石原季隆於滝山下之旅泊撰之



牛木